Vol..301　ピケティの「２１世紀の資本」を読んで（平成27年4月10日）

100万部のベストセラー、950頁、厚さ4.4cm、6,000円！凄い本が出たもんだと思いました。

何人かの友人に聞いてみましたが、ほとんどの人があの分厚さ、頁数、読解しにくい難しさ、読み終えてわからない、わからなかったと言う返事でした。私は原書邦訳本を避けて、高橋洋一氏の「ピケティ入門（160頁）」を読んでみました。一度読み通し、二度はメモを取りながら読んで結果のメモ量だけでこの通信字数制限を遥かに超えてしまいますので、私自身も納得できないまま無責任にも書いてみましたので御判読下さい。

かつてサイモン･クズネッツは、資本主義の初期段階では所得格差は拡大するが、やがて経済成長によって所得格差は縮小して行くと唱えて第１次世界大戦以降の所得税の時系列データーを分析し、所得格差のレベルがいったん上がって下る「逆Ｕ字曲線」を描く理論を唱えてノーベル賞を受賞したのであります。

ピケティもまたクズネッツと全く同じ手法で分析をするのですが、クズネッツは「第１次世界大戦以後のアメリカの所得税」と言う量と幅の中のデーターで範囲が極めて限定された分析でありましたが、「逆Ｕ字曲線」を描いて格差を縮小すると言う分析結果は間違いないものでありますが、ピケティはクズネッツよりも長い時間軸、より幅広い地域のデーターを集めて分析をしてみる手法を取った所、確かに一旦格差は縮小するがまた格差が拡大する傾向を見出したと言う新資本論？であります。データーを集めた国数20カ国、タイムスパン古代０年よりの推移、2100年までの予測、凡そ2000年余りに及ぶものであります。今日の米国のみならず格差問題は世界中に拡大し、近い将来正しい施策が施行されるきっかけとなるでしょう。とピケティは予想し、更にそれを漫然と期待してはいけないこの戦いは過去にいくつもの大きな戦いが繰り広げられてきた。今後も起こるかもしれない。今後私達の格差なき社会に変えて行くのかは私たち一人一人の考え方にかかっております。

経済とは良くわからないからと言って済まされない時であります。他人に任せておいてはいけない時代であります。経済人だけでなく市民もすべてであります。

先日の日経新聞のピケティインタビューで「今後世界のGDPは1.5％と予測しております。日本は世界の中で最低であります。もっと景気を回復させることが大前提であります。安倍政権、日銀が立てた目標を断固としてやり遂げると言う強い意志を貫けば人々にインフレマインドが起こる経済論理があるのです。インフレは多くの国民の皆さんが心配している公的債務を解決してくれるからであります。例えば明治維新以後日清・日露・支那事変・大東亜戦争の債務はいつの間にか全部消えてしまったのは･･･インフレの力なのです。」

「秋元秀夫の地方創生策」は、ブッシュ小泉内閣にあって廃止された「大店法」の復活であります。

大店法は日本の歴史風土、習慣、狭い国土、資源無い国、勤勉な民族の人達が助け合い、分かち合って、共に生きて行くためにふさわしい法として日本の国が作ったものでありますが、日本の強すぎる経済力をつぶすのにはこれを支える中小零細業を潰滅させることだとの米国の戦略があったからです。

（高橋洋一ピケティ入門を引用）